

資料紹介

太宰府の書画家吉嗣拝山等の活動を明治大正期の新聞記事に見る（1）

田 鍋 隆 男

近年、美術史学会で話題になったことに、太宰府市教育委員会が発行した太宰府の絵師調査報告1『斎藤秋圃・梅圃関係資料』(太宰府市の文化財第133集、2018年)、同2『吉嗣家資料 [印章編]』(太宰府市の文化財第140集、2021年)、同3『吉嗣家資料 [書画編]』(太宰府市の文化財第144集、2023年)がある。このシリーズは太宰府所縁の絵師について、大学教授や美術館学芸員そして教育委員会の専門職員等によって、時間と労力をかけて、残存する資料を細部にわたり念入りに徹底的に調査し、その成果を報告したもので、今後の太宰府絵師研究の進展に大いに貢献すると思われる。その丁寧さはさすが学問の神様が祀られている太宰府市だと言われ、さらに調査関係者によって詳しくわかりやすく調査過程や調査した画幅や下絵などを解説した、カラー印刷物『宰府画報』が文化財課から季刊発行されて、市民へのアフターケアも怠りなくおこなわれている。今後もこの事業は継続されるというので、斯界から新たな発見などが期待されること大である。

ところで太宰府書画界といわず福博そして筑後、日田方面の大御所的存在であった吉嗣拝山はじめ、萱島秀山といった書画家等は当時どのような活動をしていたか、いつどのように展覧会等を開催していたかを知るために地元紙の『福岡日日新聞』や『福陵新報』、『九州日報』などの新聞記事から拾ってみることにした。『福岡日日新聞』は明治13年(1880)に創刊(のち昭和17年(1942)に『西日本新聞』と改称)され、『福陵新報』は明治20年(1887)の創刊(のち明治31年(1898)に『九州日報』と改称し、そののち『西日本新聞』に併合される)で、絵師の行動や展覧会活動などは文芸部記者によって記事が書かれ、写真技術や印刷技術が未発達のころは各社に専属絵師がいて挿図を担当していた。令和6年(2024)4月太宰府市文化ふれあい館で企画展「近代のきらめき 古写真が伝える太宰府の文人たち」(会期4月13日～7月21日)が開催されたが、これぞまさしく新聞掲載記事の現場を撮影した古写真であった。

なお人権に配慮し、また当時の記事の趣旨を失わないようにして改めた部分があることと、漢字の画数が多くて文字がつぶれていたり、印刷が不鮮明のため判読不能の箇所は□としていることをご了承ください。

新聞記事

明治15年(1882)

11月、雑報。日本画復興を目的に東京上野で開催された第1回内国絵画共進会に、太宰府の書画家吉嗣拝山が果疏ならびに山水の図を、同萱島秀山が花卉の図を出品した。「拝山の画は自由自在に活発と言おうか磊落と言おうか一風異った妙味がある」と評され、春翠(福岡出身の日本画家松平春翠のことか、あるいは柳河出身の中野春翠か)の蘭亭の図は流水の屈曲する模様や人物の位置に能く配慮がされている。博多の南画家上田鐵耕の花卉の図は能く描写していると東京通信社の通覧記中に書かれている。(註1)

明治17年(1884)

7月2日、雑報。太宰府の書家宮小路浩潮(天台宗僧)が博多中島町の旅館京屋に滞在中、糟屋郡青柳在住の有志より招聘され、約1週間現地に滞在して揮毫することになった。(註2)

7月、雑報。吉嗣拝山の近著『太宰府廿四詠解□』を、目下福岡因幡町の城原廣得外数名にて編纂中とのこと。^(註3)

7月23日、雑報。中島町京屋へ寄寓している宮小路浩潮は、今日より再び宗像郡地方へ歴遊するとのこと。また同氏はこのたび箱崎八幡宮に掲げる大額「神人虞樂」の大字4字と、西公園に掲げる同じく大額「群賢畢至」の大字4字を揮毫した。^(註4)

明治19年（1886）

7月、絵画共進会の受賞者。今春に東京上野公園において開催された東洋絵画共進会にて褒賞受賞者の内、福岡県出身は久留米の三谷有信（密画「義家兵書を読む図」、疎画「鶏の図」、狩野派銅印）、太宰府の萱島秀山（清国南宗派）二等賞状、そして博多の上田鐵耕（同）三等褒状の3氏である。

^(註5)

8月6日、太宰府の星奠会（せいてんかい）。陰暦の去る6日、例年の通り吉嗣拝山の自宅において星奠会が催され、文人墨客らの書画が披露されるなど相変わらずの盛会であった。^(註6)

明治20年（1887）

1月、（汚染のため判読不能）室内には諸々の古書画が掲げられ縦覧に供されていた。それの中には貴重な幅も少なくなく、諸方より追悼の意を表するために寄贈された書画が最も多く、中でも最たるもののは京都の日本画家鈴木百年、守住貫魚、太宰府の吉嗣拝山、肥後の絵嘸、丸江等にて、詩には清国の蒲雪鴻など翁の友人石門道人および翁の門人等が頗る多い。席上揮毫をしたのは近傍の能書家であったが、当日の風雨にも拘わらず久留米地方よりは旧久留米藩絵師南画家中村雲濤、南画家近藤藍蘆の両氏が泥路の中来会し揮毫した。午前11時より饗宴が始まり午後10時頃には散会した。当日の来客者は無慮300有余人あり近ごろ稀な盛会であった。^(註7)

2月21日、墨客王治本氏。先月から滞博中の清国の書家王治本は、来る21日当地を出立し吉嗣拝山と筑後久留米に回遊すること。^(註8)

4月、白珊瑚の洋杖。因州鳥取に産する白珊瑚で作られた茶杓とか食箸は世上に賞賛されているが、この程同地に寄留している熊本県出身の富田真一が、吉嗣拝山に寄贈した白珊瑚の洋杖は、手軽にして余程の佳品である。^(註9)

8月、太宰府の星奠祭（ほしまつり）。御笠郡太宰府村は吉嗣拝山はじめ文人墨客の淵叢ともいいうべき場所柄だけに、毎年旧7月6日の星奠祭は書画を展覧するなどして随分盛んである。本年はとりわけ書画の数も多く、余興に清楽の合奏または烟火の発揚等もあって一入（ひとしお）の盛祭であるという。^(註10)

明治21年（1888）

7月17日、墨客の観花。吉嗣拝山、博多在住で太宰府出身の医師井上侃齋（かんさい）、博多の医師原三信の3氏等は、昨日東公園にて蓮の花観をしたこと。^(註11)

8月2日、書画会に御招待。目下滞博中の対馬出身で東京在住の書家宗像雲閣ほか福博有志20余名の発起にて、明2日正午より福岡大工町にある神道中教院において書画会を催す。同会には吉嗣拝山等の書画家が多く出席するということもあり、さらに旧福岡藩主黒田長知氏をはじめ多くの来賓が招待されているという。さぞかし盛会になると思われる。^(註12)

8月、吉嗣拝山氏詩を吉本襄君に贈る。吉嗣拝山は此程高島炭坑の事故の惨状実況を読み、憤慨の余り咄嗟に七絶および五古各々一篇を賦して吉本に贈ったという。その詩とは「讀吉本襄君所著高島炭坑々夫之慘狀　写出坑夫虐遇情、天悲地泣鬼神驚、人間痛苦無由訴、只願死期不願生」。また得五古一篇重録「昨聞火山裂、其慘可以驚、今聞坑夫苦、其虐不堪情、共是攢眉事、不覺淚痕生」である。^(註13)

8月13日、星奠会。太宰府よりの報によると、8月13日は旧暦7月6日に相当するので、例年通り吉嗣拝山宅にて星奠会が開催された。出席者は御笠郡の有志者は勿論、那珂郡辺よりも多く総員70余名の多人数であった。また出陳された70余幅の軸は福博および佐賀蓮池、筑後地方の文人墨客から寄送されたものであった。来会者は深更にまで及び、席上にても書画詩作等があり、最後には酒宴となつた。余興として月琴三絃楽人踊等があつたが、饗応中最も珍しかつたのは肥前田代より送つてきの重さが3貫目以上もある西瓜で、70名の座客に都合2片宛を分配し得たとのことである。^(註14)

8月20日、中村徳山翁の碑文。太宰府村の老儒中村徳山の寿碑文を、翁の旧門生にして太宰府の医師船越俊達の子息で独逸伯林（ベルリン）在住の、東京帝大教授で哲学者の井上哲次郎氏が草することになった。その碑文「中村徳山先生墓誌銘」が昨20日に当地へ到着した。^(註15)

9月、宰府たより。太宰府へ西下してきた京都の五卿の世話をしたことで知られる書家大城谷桂樵（おおしろだにけいしょう、太宰府神社祢宜）は嘉麻郡地方を遊歴中で、吉嗣拝山は自宅に在つて専ら江湖の需に応じて揮毫中である。このころは天満宮の秋季例祭の時期が近づき、旅宿ならびに茶亭等は勿論通常の商店に至るまで大いに物品の仕入に気張り、また筑後の莫産商人は日々幾車となく畠表や莫産を積み来り、太宰府の町中は頗る賑やかである。^(註16)

明治22年（1889）

4月26日、宮小路康文氏。浩潮宮小路康文は永らく熊本に滞在していたが、同地にて同氏の筆法が正確であるのを欽慕し揮毫を請う人が多いと新聞に屡々報じられている。同氏は来る26日に一旦帰郷し、夫より東上すると聞き及んでいる。^(註17)

8月2日、星奠会。吉嗣拝山の催しに係る太宰府の星奠会は、例により今夕同地にて開催されるとのことで、福博の文人墨客も多く参会するという。太宰府星奠会の概況について今又該夜の実況を聞くに、展観された書画数は60有余にして、皆な太宰府人の揮毫したもので、その多くは拝山および父梅仙の門生である。詩歌は当時有名な元寇有感の画題にて、来館者頗る多くたいへんな盛会であった。就中同村の理髪業上田某なるものは齡未だ15歳にも満たざるに、その詩作の秩然として筆力の活発雄壯なることは、實に奇童と云うべきものである。60有余名の筆者中には妙齡の女史も數名ありとのこと。展観の余興として清楽合奏、烟火、囲碁、抹茶、手踊等の催しがあり、雅俗共に歓を尽して退散したのは正に翌日の午前2時過ぎであった。拝山は「聞元寇紀念碑之挙有感」を稿す。^(註18)

9月12日、浩潮氏の揮毫。宮小路浩潮が豊前田川郡有志の聘に応じ、同地方漫遊中のところ、去る12日は香春の俱楽部において揮毫をおこなつた。依頼者が続々あり、なかには有志者が香春神社に奉納する大額面に「清輝」の2大字（縦4尺横1間半）、ならびに大旗2旒に神詠の2句即ち「城中適満菩提心境内掃除雜染塵」等を揮毫した。その筆勢は龍蛇が駆け巡るような勢いがあり、墨痕は雲烟が翻る如く仰ぎ觀るほどの上出来であった。^(註19)

9月16日～28日、吉嗣拝山氏。吉嗣拝山は壱岐国を1週間滞在の予定で、16日の郵船平丸にて出發した。そして壱州漫遊を終えて27日の便船にて帰郷し、翌日郷里へ向け出發した。^(註20)

10月31日～11月6日、宮小路浩潮氏。福岡橋口町の割烹旅館海容館主は宮小路浩潮を招待し、昨日より1週間同館において、新築の楼上に掲げる額面及び掛物等の揮毫を依頼した。^(註21)

明治23年（1890）

2月16日、宮小路浩潮氏。宮小路浩潮はこのころ豊前中津地方へ遊歴中であったが、去る16日帰府したという。^(註22)

4月27日～31日、宮小路氏の揮毫。宮小路浩湖は、久留米市京町四丁目の木本久治氏および有志

者の招聘に応じ、本日より5日間同地にて揮毫をおこなう予定である。^(註23)

5月、宮小路浩潮氏。宮小路浩潮は当時久留米市日吉町の小寺傳氏宅に滞在し諸人の需に応じて揮毫していたが、本年よりは所得税をも収めること、又聞く所に拠れば不日上京するという。^(註24)

明治25年（1892）

1月、拝山氏の書簡。本紙に登場する「菅聖実録 尊愛鑑」に付菅公に因んだ画を掲載したいので、太宰府の拝山先生にお願いしたところ、活達なる画が寄せられた。先日1回これを掲載したところ大いに好評を博したが、この程氏より以下の書面が寄せられた。確かに意氣豪にして活達なる絵画も木版印刷のために気韻を失せ、加えてステロ版という印刷法のために筆勢を損する所も少なくない。これでは揮毫者には気の毒の至りであるが、読者看客は菅公の因みによりこれに満足したと思われる。その木版及びステロ版のため真画を損じているということは看客も宜しく諒察して欲しい。「七日芳翰拝讀仕候 菅公伝記挿画の件に付御申越の趣委細了承仕候。然に拙筆は只寓意画にして美術的に無之、板（版）下に相成候ては眞の塗抹同様の事に相成甚見悪く却て美術的の板下の本が宜敷乎と相考申候。過日も第一小□に梅林と聖廟の趣を拝見致候処、全く運腕の精神は漫滅致し候□相成居候に付如何乎と愚考仕候。殊に図柄も御望通りに不能成形旁以て御用に相立申間敷此段申上置候。寓意にて差支無之は□□拝写可仕候。菅公の事歴に係る事故決て勞を厭ふ訳では無御座候。不取敢御答迄早々頓首 吉嗣拝山 福岡日日新聞社 御中。」^(註25)

明治27年（1894）

5月20日、在峠の宮小路浩潮翁。宮小路浩潮は山梨県甲府の文人墨客の団体より招かれ、甲府柳町米倉氏方に5月20日より約2週間滞在の見込みであるが、頗る多くの揮毫依頼者がやって来ている。ところが大坂に注文している用紙が延着のため、入峠してからは絹本のみ揮毫していた。やつと用紙が到着したと思ったら、有志者からさらに10日間滞在延長の申出があったので諾として揮毫に従事している。よって上京はその後となる。^(註26)

明治28年（1895）

4月14日～27日、太宰府渡宋天神の祭典。太宰府町威徳寺（現在の光明禪寺）にて14日より2週間、同寺院に鎮座ある渡宋天神六百五十年祭を執行する。また同時に同祭典施行中は書画の展覧会をも催すという。^(註27)

10月、浩潮翁応天門の額を書す。宮小路浩潮は昨夏以来各地を漫遊中であったが、今回平安遷都一千百年紀念祭に際し応天門の扁額をその筋の命により、去る5月中旬に揮毫することになった。そして本月の祭典前日に立派に表装されて応天門の二重屋根の真中に掲げられ、浩潮は計らずも名誉を博したと云われる。往古この門の扁額は弘法大師が勅額を承り書いたるものなるが故に、今回も其の筆意に倣うべしとの下命にて、浩潮は一生の心血を注ぎ込んだ。因に記す翁は本年12月中に帰県する予定である。^(註28)

11月14日、鐵耕館秋期大会、竈門神社昇格奉告祭。博多上祇園町の日本画家上田鐵耕社中の発起にて、14日より太宰府町威徳寺において上田鐵耕門人による絵画展覧会が催され非常に賑わった。翌15日には竈門神社官幣小社昇格奉告祭が執行され、太宰府町は勿論その付近の各町村は悉く酒肴を設けて祝意を表した。勅使として出張した福岡県庁書記官緒方道平以下津田、伊木の両属は竈門神社奥殿の修繕等を巡視し午後帰庁した。^(註29)

11月23日～24日、鐵耕館の絵画展覧会。上田鐵耕門下諸氏が催す絵画展覧会は再昨日より2日間開会された。会場の鐵耕館入口の門の左側より種々の絵画が掛けられ座敷より奥の間まで殆んど100余幅、中には県収税長片山恭平、資産家山路重種、実業家池稻蔵等諸氏が秘蔵している古画の

出陳もあり一種の見栄えを添えた。1昨日は県知事岩村高俊、片山恭平、神職歌人末永茂世、実業家森岡榮、富田彌三郎等の諸氏を始め、画家としては拝山、秀山等の諸氏も出席した。我社所属の日本画家今村外園も優待に応じて出席したが、岩村氏は門下の諸氏を集めて美術上の談話などを丁寧にされた由。陳列の絵画は何れも上出来にて、中に灘川の景色と云う課題に応じて物された画の中でも、某々氏等の手に成る3~4幅は最とも上出来であった。縦覧人中稍々絵画の心得ある人に投票にて優劣を決めてもらい、褒賞等を与えることになっているが、『中原の鹿、果して誰の手に帰するやら。結果は判り次第掲載する予定である。』(註30)

11月25日、絵画展覧会褒賞授与。上田鐵耕門下の絵画展覧会は予報の如く去る23、24の両日鐵耕館において開会し、岩村知事、片山収税長等も参觀し、画家では拝山、秀山両氏の臨席もあり、參觀諸氏投票の結果により昨日次の諸氏に賞状及び賞品が授与された。「灘川の実景の部」一等浦栄次郎(号は耕民)、二等末次朝廣(号は山月)、三等宮本芳次郎(号は清秀)、四等平野二郎(号は龜山)、「隨意新案の部」一等半田鐵舟、二等安永東之助(号は耕嵐)、三等宮本芳次郎(号は清秀)、四等大山政吉(号は香雪)、五等秋田新一(号は星耕)、「海岸景色の部」一等末次朝廣、二等宮崎要吉(号は一耕)、「古画模写の部」一等秋村善太郎(号は□耕)、二等河関吉□(号は珂山)、三等平野二郎、四等酒井よね(号は花香)、五等八尋くに(号は鳴鳳)、六等樋口元次郎(号は春山)、七等笠富次郎(号は管堂)。(註31)

明治29年（1896）

1月16日、梅僊翁逝く。吉嗣拝山の父君梅僊(仙)翁は兼ねてより病氣療養中のところ昨16日逝去了。翁もまた斎藤秋圃の弟子にして名が知られた画家であった。惜むべきことである。(註32)

7月、宮小路浩潮翁。浩潮は6月6日に東京を出発し、目下名古屋市秋琴樓に逗留し揮毫に追われているというが、宮内大臣土方久元氏の知遇を得、この程同大臣より氏の許へ贈られたる次の詩書がある。「太宰府人、宮小路康文、善書、夙□菅公遺法、頗得此神髓、曩献三体書、姿勢遒勁、筆致最妙、頃者來求別号、乃書固古梅二字、以一詩贈之、泰山土方久元 馥郁春光九百回、社頭老樹絕奇哉、千秋誰不仰神德、闔也令名声似梅」。(註33)

12月5日、遺跡復帰式。予て風説ありし如く太宰府横岳崇福寺の遺跡は若松の有力家杉山松太郎氏の投資と博多の薬種商内海善兵衛、吉嗣拝山、安垣徳太郎、木村矢一諸氏の周旋とに依り、いよいよ昔日の如く崇福寺の諸管に復帰したるを以て、来る5日に遺跡復帰式を執行する予定である。式は横岳旧趾において執行し席上点茶の庭を設け、また太宰府威徳寺においては崇福寺什宝物の展観をする。かつ同所において来觀の人々へは斎(とき)を饗するという。尤も当日は別に招待状を發しないので有志家の來觀に一任することである。因に記す横岳は該寺開山大應國師創業の靈地にして、山谷尤も幽遠の勝(しょう)に富んだ処と。片や霜後肅散の光景に加えて書画茶事の風流あり、白雲深處も定めて枝履(じょうり)の雜踏を見ることになるだろう。(註34)

明治30年（1897）

4月、高山正之の書幅40円。博多川端町の岡部千仞(せんじん)が所蔵する勤皇家高山彦九郎正之自書幅は、この程吉嗣拝山の周旋により40円にて広島の将校某に譲られ、某は又之を陸軍学校に寄付し軍人の志氣鼓舞の一端に供されるという。正之の精忠義膽卓見高識千載の上今日あるを洞見する。その先見の卓なる千載の下読みをして奮發興起させるものがある。(註35)

5月16日、黒田長成(ながしげ)氏と豊公画像。旧福岡藩主黒田長成氏が着福の翌16日に墓参のため崇福寺に立寄った際に、内海善兵衛氏(博多商業會議所、薬品商の福岡徳盛会常議員)が拝山揮毫の豊公画像をお見せしたところ、豊国会会長でもある黒田長成氏は殊の外お気に召し直ちに受

納となった。同画は豊公が生前に自ら画工に命じ肖像を写させたという原図を写し雲中の像に描いたものにして、儒学者荻生徂徠が豊公肖像に題せる一篇の詩もある。黒田長成氏は豊国会拡張のため当地に着くや、その翌日直ちに豊公の肖像画像を入手出来たことは真に奇縁といえる。^(註36)

5月20日、黒田長成氏御下県日録20日〔第4〕。宴会の後黒田長成氏は宿舎である西高辻信稚（のぶわか）宮司の邸にて囲碁を楽しんだ。お相手をしたのは今回の黒田長成氏招待委員接待掛の小野隆太郎氏（県会議員）である。夕刻より拝山を召して書画揮毫拝見となった。

座上にて拝山は長成氏の豊公追吊詩に和韻した。長成氏が阿弥陀ヶ峰に豊公を吊った時の御咏「北伐東征百戦身、□來六十六州塵、休談充録慶長之事、寒雨断煙愁殺人」、拝山の和讚「□生雄風夙忘身、忠□誓取天下□、□伐縱横勞□角、乾坤覺展執□□」。以上の詩を一幅に認めて献じた。この外に扇面に自作の詩を題した。その詩に云わく「一両□□出土□、□來□筈俄□□、風美熊炙何会□、不及龍孫風昧高」。又扇面に牡丹を描き自作の詩を題した。その詩に云わく「三淮二水客遊心、花乱紫飛春已深、前□風流帰一□、後人絶復談遺音」。右終えて長成氏には□間、菅公を詠した転結2句。即ち「凜然氣魄白於雪、芳烈長伝幾万□」。長成氏右二句を吟詠すると拝山に向って起承2句をつけて興を添えよと言い、拝山も揮毫して御覽に供した。^(註37)

9月、吉嗣拝山氏活人形を評す。目下博多土居町の劇場安楽舎にて興行中の安本亀八（熊本出身）一座の活人形の好評を聞いて、太宰府の拝山はこの程見物のため態々出博し、その細工の精巧さに感嘆し、評して次の絶を賦し同座主に贈った。「奇工变幻妙機存、面目如生口欲言、終見乾坤真主宰、着斯百鍊不磨魂」。^(註38)

9月29日、横岳禪師開祖忌辰の詩律。9月29日は横岳山崇福寺開祖の忌辰なので、同寺の和尚は勿論2～3人の有志相謀って施行の供物を挙げた。該日供仏の詩数首を得たので之を次に掲げると「飛瀑巖前法窟□、竹蹊幽處密苔封、□光豪得摩今古、講看瑞雲横岳峰」。崇福寺住職渡邊宗訥（そうとつ）「鐘聲梵韻古禪蹊、樹老圓林苔自封、□供欣□今復續、瑞光重漲白雲峰」。和続 吉嗣拝山「山莊借住近溪邊、半作樵郎半遯禪、□月照眞脫俗、雲煙續楊也因縁」、「林泉對我常□語、松竹鶯隣或人篇、今日茗菴祖師□、復帰高倉一周年」。岡部千仞「縹織香煙續□邊、清機發動自疑禪、一菴風雨何蕭索、同室主賓是宿縁」、「淨土興亡談故事、廢人成就慨人新篇、醍醐醉裡乾坤靜、緬想開山幾百年」。用千仞韻 藤瀬冠村 熟れも清空澄澈の篇章、此時、此境に稀うとは或る詩人の評言。^(註39)

11月、吉嗣拝山翁の詩。日清戦争勃発以後に歌人詩家が吟詠を試み、その集稿は伊豆參謀大尉（宗像郡出身、參謀本部日清戦史編纂課主任）によって公表された。このなかには藤瀬冠村の寄稿や吉嗣拝山の詩「大機動演習」がある。^(註40)

明治31年（1898）

5月、九州雑俎 吉嗣拝山。病気療養のため別府八湯の一つ浜脇温泉に滞在中のところ、大分の墨客が同地蓬来館にて書画会を催し、拝山を招こうとする。^(註41)

12月、九州日報社の新社屋移転を祝して博多大黒流取締委員諸氏より、吉嗣拝山揮毫の四大字「唇吻策動」という墨痕鮮やかな書の額面が贈られた。^(註42)

明治32年（1899）

4月、漫録。巳亥春日、觀梅於菅廟背後氷心閣、錄呈宮崎来城（久留米出身）吟壇。吉嗣拝山「玉粉玲瓏春映晴、賽人無數入芳情、余香襲、□千枝影、幽怨訴人獨鶴声、奇骨偏憐同我瘦、澄心爭得似君清、対花淺酌歎催老、霜鬚怕他白□生、客爲看梅問聖蹟、芳魂玉簞費□容、絕憐□士林間立、恨不美人月下逢、蕊歷寒霜心似鉄、幹臨流水影如龍、綺羅散盡神園寂、孤鶴声中落日春」。来城小隱云、拝山先生年年作梅花詩、近体古体積如丘屋、清功文字、不唯邦人咨賞、喧傳於禹域者亦為不

少、今此二律、則最近述作、雖未定稿、而歷落清奇、健拔不可敵、且從其格律論之意之所到、心之所會、或不嫌孤平、或不避仄對所謂不可以尋常一樣繩墨規者、筋骨却在其中、昧者不得窺知。^(註43)

4月8日～9日、五岳上人の追善会。豊後日田の画僧平野五岳の追善会を日田において開催するところに、吉嗣拝山から次の絶句が送られてきた。「一世才兼徳、名声遍宇区、妙棋忘歲月、□筆滿江湖、隨伴欠吟錫、追懷倒酒壺、淮南山水好、風雅倩誰扶」 己亥四月有 五岳先生追薦賦以代蘋藻 吉嗣拝山。^(註44)

明治33年（1900）

10月23日、写真献納せんとす。福岡行啓の東宮殿下（のちの大正天皇）が太宰府御巡啓に付、神社々務所は博多古門戸町写真師三吉利三郎（博多写真師の泰斗）に太宰府景勝の撮影を依頼し、その写真を献上することにした。利三郎は日下日々沐浴斎戒して撮影中という。撮影候補地は都府楼、觀世音寺、水城、榎寺、太宰府神社、御池反橋、楼門、銅鳥居、梅園、竈門山、西高辻家彫刻□、博多□□である。後日、太宰府神社境内の図8葉と水城、都府楼、觀世音寺、榎寺等12葉の中型写真が、太宰府神社社務所から管公会会长黒田長成氏を通じて献上された。^(註45)

10月29日、行啓雑事、画家の光栄。東宮殿下が太宰府天満宮御参詣の際合議所において御休憩のところ、大城谷桂樵、宮小路浩潮、萱島秀山、吉嗣拝山が御前にて草した。桂樵は一詩「巡啓撫民遍國疆、奉迎鶴駕到吾鄉、請看菅広飛梅樹、一接大顔增瑞九」を揮毫し、また浩潮は「龍威虎勢」の四字を揮い、秀山は鯉と双鶴を書き、拝山は前号既記の外「玉□到太宰府有園梅御植之事敬題一首以表欣離之微志 階前千里飛梅外、更看一枝御植芳、恩賜年々春色麗、神靈亦今拝余香」の一詩を奉った。東宮からこの4書画家へ金1000円宛が下賜された。^(註46)

12月2日、軒号披露宴。梅花画幅蒐集家で有名な東中洲町の伴蜂船氏が梅花の画幅25幅を集めたので、今回その居を古梅軒と号し、昨日その画幅展覧会と軒号披露とを兼ねて祝宴を開いた。当日は市内の紳士紳商をはじめ、吉嗣拝山や上田鐵耕等の文人墨客30余名の来賓があった。先ず古梅軒において一同月ヶ瀬の梅樹にて作られた荒木の木杯にて神酒を飲み、それより正の家の宴席に移って、席上には博多芸人たちの粋を抜きたる数番の演芸あり、頗る豪興を極め宴は夜に入るまで続いた。^(註47)

明治34年（1901）

4月、萱島秀山の受賞。萱島秀山は大坂府にて開催された全国南画共進会に出品した画が二等賞を受賞した。^(註48)

12月、一千体菅公像を刻む。東京美術学校教授竹内久一は明年菅公一千年祭を期し1000体の神像を刻むという。氏はその1000体を鎮守したる浅草神社に合祀し、尚外に1000体の同一神像を刻みて世の聖廟を尊信する人に頒布することにした。元来菅公の神像は概ね所謂鉛の天神のみにして神像として尊敬するに足るもの少なければ、氏は考証を伊勢貞丈の菅像弁、白川樂翁公集古十種製版後に得られたる菅像及び穴師神社の秘仏等に置き、3寸6歩の坐像に刻む筈にて、希望者は一体金2円50銭（一千年の1000疋すなわち25日の2円50銭なり）を東京浅草永住町千体会事務所に申し込めば、明年1月25日より3月20日までの内に送付されるという。^(註49)

明治35年（1902）

1月、石門を寄付する。博多柳町貸座敷新三浦屋は菅公一千年祭なので大石門を太宰府天満宮に寄付した。同石門の表面には吉嗣拝山による揮毫「春秋嚴大社」「今古想遺音」の文字が刻され、菅廟西門口に建設されたという。^(註50)

1月17日、絵画展覧会開設に就いて。福岡県にて来る3月菅公一千年祭挙行に際し、内外人の

集散を機とし、福岡市において美術の発達教育の進歩を裨益するため、絵画展覧会開設の件に関し旧臘郡市長会合の際に協議した。本県知事は同会の趣旨目的を翼賛し、之が成立と同時に充分の効果を収めようと考えるが、諸般の設備に要する経費については各郡市の贊助を得なければ成立は難しい。よって贊助会員及一般会員募集勧誘奨励方に就いて、深野一三県知事より昨日各郡市長に依頼書を発送したこと。^(註51)

3月、菅公一千年祭彙報、美術品展覧。大祭に付3月25日より4月25日まで、文書館および威徳寺において宝物および美術品を陳列し一般に公開される。文書館内神器の間には太宰府神社の宝物、貴顕の間には宮内省御下賜の美術品を陳列し、その他天下の珍器名幅延喜時代の美術品等は同館に陳列する。各地より出品の美術品は威徳寺内に陳列する事になるが、目下続々送付し来ている該出品絵画の十中八九は南宗画であって非常に多数である。大祭中は1回100幅位宛5日若くは1週間位にて掛替えして順次出陳する予定である。これらの陳列は4～5日中東京より古器物陳列に長けた帝室技芸員下條正雄氏（貴族院議員、日本画家、帝室博物館評議員）が来県の上夫々決定すること。なお現今諸名家の美術画は1県5名宛（福岡県は人員に限りなし）と定め東京において募集し既に画帳としたので、不日下條氏携带来府の上は文書館に陳列する由。^(註52)

3月26日、菅公一千年大祭。文書館および威徳寺において開催の古美術品展覧会は、東京の古筆鑑定家古筆了信、日本画家八木岡春山両氏の担当にて昨日までに略陳列が終り、本日頃より一般に縦観されること。^(註53)

3月、菅公頌徳碑。太宰府吉嗣拝山、久留米内藤寒山、同近藤藍圃の諸氏が発起して頌徳会なるものを起し、書家の揮毫した梅花扇2万本を発売し、その益金で菅公頌徳の碑を建設する計画である。同碑は青銅製にて表面には梅鉢紋を彫り『千秋文字祖万世帝王師』の文字を刻することである。^(註54)

3月、記念の釣額。菅公会にては会に対する功労者に対し、記念品として古鏡形に菅公座像が入った釣額を制作して贈与することにした。過般来博多出身の彫刻家山崎朝雲へ依頼して彫刻の上鋳造中であるが、その見本として宰府に送られて来たものを見ると、頗る立派なものである。^(註55)

3月、能舞台の事。敬神自愛講の寄付による能舞台の工事はその後大いに捲取り、昨日に至っては正面の壁上に萱嶋秀山の筆にて松が描かれ、その両面には凡そ200人位が収容できる棧敷が設けられている。^(註56)

3月30日、菅公一千年大祭（第六日）。揮毫所が一昨日来北梅園内に設けられているが、是は書画得意の人々が扇面其の他に揮毫して需める人に与える所である。^(註57)

4月1日、菅公一千年祭彙報、文書館陳列品。文書館にては宝物古代美術品および書画等を陳列する予定であるが、その点数が夥多なので文書館では宝器宝物皇室御所蔵の美術品をのみ陳列することにした。また陳列品は各地よりの申込を許可すると、その数非常な多数に上り到底陳列するの不可能なので、事務所にて調査した各地の古美術品、書画を選定して出品陳列する事にした。その調査は既に1000点が終了している。此等陳列品の鑑定配置等は古器物陳列に詳しい帝室技芸員の下條正雄氏来県の上、夫々着手することにしているが同氏は貴族院議員でもあるので議会閉会後来県との連絡があった。^(註58)

4月1日、菅公一千年大祭。文書館と威徳寺の古書画展覧会は相変わらず日々参觀人が少なからず来ているが、1日より新たに陳列した古書画の中には、文書館に在って次の各種逸品中の逸品が鑑賞出来るとのこと。それは土佐行光筆天神縁起、劉雪湖筆月下梅園、雪村筆綱敷天神、相阿弥筆山水双幅、雅楽介筆□□□、牧溪筆叭々鳥、鐵舟筆蘆雁双幅、雪村筆猿猴三幅対である。なお藤原為

家卿の隨身隨騎の巻物は天下の一品と称すべく、定家卿小倉色紙八重桜は色紙中の逸品と称されるものである。同館は展示替えを来る8日、15日、22日の3回おこなう予定である。(註59)

4月2日、菅公紀念絵画展覧会。昨日より一般の縦覧が始ったが、会場内外の装飾能く行届き陳列した絵画は380余点に達し、県下は勿論東京、大阪、京都其他全国著名の画家が丹精した作品なので、観るべき価値あるものが多い。東京美術学校より出品される予定の優物は未だ到着していないが、東京の日本画家尾形月耕「雷神、風神」2幅、京都の鈴木松年「梅とウソ」、大阪の萩尾九臘(くさい、上妻郡上広川村出身)「龍」六曲金屏風、久留米の松本松壽「棕櫚」二曲銀屏風、油絵「少女に花」などが見栄えしている。出陳数多数に付5日からは共進館本館でも陳列し展示替えもおこなうこと。(註60)

4月2日、古書画展覧場。文書館および威徳寺における古書画の展覧場は日々参觀人が多く、殊に一昨1日の如きはその数幾千人になるか判らないほどで、陳列場の竹柵が押し折られるほど非常な雜踏を極めた。なお文書館で今回新たに陳列された菅公の真筆は彼の五言絶句の筆勢とは異なつたもので、また威徳寺の田能村竹田の山水画など22幅は二度とこれだけ一度に堪能できないほどの数である。(註61)

4月、太宰府絵入手巾(しゅきん、ハンカチ)の販売。大坂市本町四丁目渋江音次郎氏は今回の菅公祭に際し拝山筆の太宰府八勝美術絵入手巾を販売すること。(註62)

4月、菅公頌徳碑と揮毫所。吉嗣拝山、内藤寒山、近藤藍圃の3氏が発起して、菅公一千年祭にあたり一大記念を不朽に伝えるために、菅公頌徳碑建設を企画しその揮毫所を北梅園に設けているが、日々多数の文人墨客が来集していること。(註63)

4月16日、菅公紀念絵画展覧会に美術院の大幅出品。昨日新たに東京美術院より次の名家揮毫に係る大幅が到着したので、本日より共進館および福岡市天神町の高等女学校跡会場に陳列するという。橋本雅邦「靈昭女」(代価500円)、横山大觀「黃昏の園」、水野年方「官女の□」(代価50円)、小堀鞆音「官女」(代価70円)、山田敬中「秋景山水」、菱田春艸「蘇軾訣別」、尾竹竹坡「賽河原」などその他数十幅あり、どれも大幅ものにて雄勁美麗で、会場に亦一層の光彩を放つことになる。陳列品は屡々掛替えられ、それと共に展覧会場は恒に新たになり、観覽人は漸次増加し益々盛況を呈することになる。(註64)

4月23日、画伯丹陵。東京の歴史画家畠田丹陵が昨日来福して、菅公紀念展覧会を縦覧した。(註65)

5月2日、絵画展覧会慰労宴。午後4時頃より菅公紀念絵画展覧会の慰労とその祝宴が東中洲丸萬にて開かれた。来会者は福岡市長松下直美(なおよし)、同助役小野直路(ただみち)、県属古賀只平(しひい)、同岡村雪三郎その他同会のために尽力した人々、福岡日日新聞、九州日報両新聞社員、発起人、関係者等30余名である。発起人総代の日本画家楨岡蘆舟(福岡日日新聞専属挿図画家)の挨拶があり、次いで日本画家萩原茗圃(福岡高等女学校図画教師、福岡日日新聞社友)より会計報告があった。贊助員の出金総てを取纏めれば多少剩余金が生じるぐらいである。よってこれを銀行に預け入れ、他日美術絵画奨励会の経費に充てる事等が協議され、一同大賛成の決議を得て宴会に移った。余興として少女義太夫竹本大八の淨瑠璃「三勝半七酒屋の段」があったが、僅か11才の少女が天性の美声にて縦横自在に語る非凡の才に一同感心することしきりであった。さらに最も楽しみな福引があり、酒席では水茶屋券番の芸妓数名が間に入つて場を盛り上げ、盃が廻つて陶然陶酔の来会者の歌う者あり舞う者あり、各十二分の歡を極めて散会したのは10時頃であった。(註66)

11月1日、浩潮翁の揮毫。宮小路浩潮は昨今博多片土居町称名寺に滞在中であるが、本日より向う1週間揮毫の需に応じることである。(註67)

12月21日、箱崎宮祝賀祭典。午前9時半より官幣中社箱崎宮にて営繕落成式ならびに樓門古社寺保存会特別保護建物編入社地復旧奉祝祭典が執行された。当日は朝来細雨が降りしきるなか極めて多くの参拝者があり、千代、箱崎両尋常小学校ならびに箱崎高等小学校生徒一同が参拝し「君が代」を合唱、式後故葦津磯夫宮司の招魂報告祭が執行された。その後に公会堂において来賓一同へ酒肴の饗應があり盛況を極めた。参列者は田尻義重警部、戸川直、小田原、戸田宣徳、長澤、堀、神武、左の各県属、折田福岡小林区署長、明石郡書記、吉嗣拝山、木下美重香椎宮宮司の諸氏および本社員等60余人にして、宴中福引、筑紫琵琶等の余興があつて午後5時頃散会した。(註68)

明治36年（1903）

2月27日、菅公頌徳碑。吉嗣拝山等の発起にて昨年来博多深見鋳鋼場において鋳造中の菅公頌徳碑が愈々去月26日竣工したので、一昨日同地へ向け運送された。既に境内東梅園の噴水池の傍らに台石も設置し終り、当日直ちに建設に着手し夕刻には据付を完了した。同碑は四角形青銅製にして高1丈重量200貫あり、上方額面頌徳碑の3字は黒田長成氏の揮毫にて、下方には拝山の揮毫「千秋文字之祖万世帝王之師」の一聯が刻され、下段には梅の古木に梅花を巻絵にしたもののが彫刻されている。鋳造費は到底醸集金だけでは不足していたが、深見氏はその損失を省みず材料を精選し最善の鋳造に努めたという。なおその除幕式は旧2月彼岸中に梅園内において挙行する筈という。(註69)

3月22日、菅公紀念碑建設式。吉嗣拝山の発起にて博多深見平次郎氏の工場にて鋳造された菅公紀念碑の建設式（除幕式）が、来る22日に同地において賛成寄付者関係人等を招待しておこなわれる予定である。(註70)

明治37年（1904）

2月、詩歌募集。本年は太宰府岩屋城主高橋紹運没後319年に当るので、筑紫郡内の雅人は今回300年懐旧の和歌詩文俳句書画等を募集することにし、その締切期日は2月末日迄で課題は「奇岩懐旧」とのこと。(註71)

9月21日、宮小路浩潮氏逝く。浩潮宮小路康文はかねて病氣療養中のところ薬石効なく昨21日午前2時逝去した。葬儀は今日22日の午後4時より執行されること。次に南摩綱紀氏（なんまつのり、東京高等師範学校教授）が明治23年7月に識した「宮小路浩潮翁略伝」を掲載。(註72)

明治38年（1905）

2月27日～28日、太宰府神社の宝物陳列。太宰府神社では来る27、28両日例年の通り飛梅講社員のために祈祷祭を執行する。そのため宝物を陳列して拝観に供すること。(註73)

6月27日、披露淨瑠璃会。久留米の淨瑠璃師匠鶴澤才十郎は今回同市日吉町二丁目に転居し、去る25、26両日間転居披露の淨瑠璃会を催した。また同市呉服町女義太夫竹本土佐榮子は、近江出身の書家巖谷一六、太宰府の絵師吉嗣拝山、久留米の絵師近藤藍圃等の合作による劇場の天井近くに飾る天幕を贈与されたのでその披露のため、本日午後久留米翠香園において女義太夫竹本土佐榮天幕披露義太夫会を催す由。(註74)

明治39年（1906）

8月25日～26日、書画展覧会。太宰府町の青年団主催にて、明後の両日太宰府神社境内会議所において、青年諸氏の揮毫した書画展覧会を開催する予定であるが、出品点数は百数十点に及ぶとのこと。(註75)

10月7日、自祝書画会。福岡天神町宮河良一氏は所有する第二新手、鴻の巣、御徳等の各炭坑水災復旧自祝のため、来る7日午前10時より水茶屋常盤館において書画会を開催する。会場には古書画展覧、席上揮毫、囲碁、煎抹茶等の各席を設け、揮毫席には吉嗣拝山、書家木村耕巖（小倉在住）、

絵師平野古桑（同）、南画家岡舟臯（しゅうこう、杵築出身）、日本画家石田東樓、日本画家平山東岳（薩摩出身）の諸氏が出席し需に応じて揮毫する。閉会後は晩餐会に移り余興には筑紫琵琶の弾奏ある由。（註76）

10月、名勝絵葉書。博多中嶋橋にある尾崎筑紫堂より「筑紫名勝絵葉書」および「紫渕勝景多」の絵葉書2種が発行された。各12枚1組にして、封紙には吉嗣拝山の雅致ある題字が印刷してある。前者は太宰府付近、後者は箱崎名島香椎付近の名所をコロタイプ版に撮影した鮮画なるものである。（註77）

明治40年（1907）

3月、巡回美術展覧会。帝国絵画弘進会は日本各地において巡回展覧会を開催し、京都の大家鈴木松年はじめ京阪における各派の日本画家60～70名の作品800余幅を陳列公開している。福岡では来る3月初旬に水茶屋常磐館（若くは寺院）にて開催する予定である。なお同会加盟の会員に対しては抽籤法により、出陳されている絹本作品を配与する予定。また当日は吉嗣拝山を始め画家の席上揮毫をも計画しており目下準備中である。（註78）

3月9日～10日、古物持寄展覧会。来る9、10両日間伴蜂龍、武石理一両氏の発起にて田中種光（太宰府出身、三等獣医正）そして吉嗣拝山など諸氏の贊助を得、太宰府神苑内文書館において古書画古器物持寄展覧会を開催する。余興には久留米淨瑠璃師匠栗林土佐榮子の抹茶席、博多加藤賢造氏の煎茶席、吉嗣拝山、萱島秀山、藤瀬冠村其他諸氏の寄合書扇面の福引、焼餅の接待及び会員相互の小物品交換並に入札等がある由。出品希望者は同館内展覧会事務所宛に申込むようにとのこと。なお、8、9両日は現下5万戸以上に達した飛梅講社の大祭もあり、九州鉄道では乗車券各等割引をおこなっているので一層の盛況を呈すると思われる。（註79）

12月8日、初老賀宴。三潴郡大善寺村々長恒尾一誠氏は本年40歳の初老に付、同郡の酒造御三家富安重行、中村綱次、首藤精氏等が発起となり、去る8日同村橋本屋において賀筵が張られた。有志者150余名の来賓があり、同地尋常小学校では古書画展覧会が開催され百数十幅の出陳があった。書画揮毫席には吉嗣拝山、萱島秀山、内藤寒山、近藤藍圃、加納雨蓬（大分出身）諸氏の揮毫があり、その他に抹茶席や、玉垂神社境内には鳥居蕎麦の接待所が設けられた。午後3時煙火を合図に賀式発起者の挨拶があって、来賓の祝詞演説、そして村長恒尾一誠氏の答辞が終ると宴会に移り、筑紫琵琶および手踊等の余興があつて盛況であった。（註80）

（未完）

註記

- 註1 『福岡日日新聞』明治15年（1882）11月8日2面。
- 註2 『福岡日日新聞』明治17年（1884）7月3日3面。
- 註3 『福岡日日新聞』明治17年（1884）7月20日3面。
- 註4 『福岡日日新聞』明治17年（1884）7月23日2面。
- 註5 『福岡日日新聞』明治19年（1886）7月9日3面。
- 註6 『福岡日日新聞』明治19年（1886）8月12日3面。
- 註7 『福岡日日新聞』明治20年（1887）1月4日。
- 註8 『福岡日日新聞』明治20年（1887）2月18日2面。
- 註9 『福岡日日新聞』明治20年（1887）4月2日3面。
- 註10 『福岡日日新聞』明治20年（1887）8月27日2面、同3面。
- 註11 『福陵新報』明治21年（1888）7月18日3面。
- 註12 『福陵新報』明治21年（1888）8月1日2面。
- 註13 『福陵新報』明治21年（1888）8月14日3面。
- 註14 『福陵新報』明治21年（1888）8月16日3面。
- 註15 『福陵新報』明治21年（1888）8月21日2面。
- 註16 『福陵新報』明治21年（1888）9月20日2面。
- 註17 『福岡日日新聞』明治22年（1889）4月30日2面。
- 註18 『福岡日日新聞』明治22年（1889）8月2日3面、8月6日2面、同3面。
- 註19 『福岡日日新聞』明治22年（1889）9月24日3面。
- 註20 『福岡日日新聞』明治22年（1889）9月17日3面、9月29日3面。
- 註21 『福岡日日新聞』明治22年（1889）11月1日2面。
- 註22 『福陵新報』明治23年（1890）2月19日2面。
- 註23 『福陵新報』明治23年（1890）4月27日3面。
- 註24 『福陵新報』明治23年（1890）5月2日2面。
- 註25 『福岡日日新聞』明治25年（1892）1月14日3面。
- 註26 『福岡日日新聞』明治27年（1894）5月6日2面、6月10日1面。
- 註27 『福陵新報』明治28年（1895）4月17日3面。
- 註28 『福陵新報』明治28年（1895）10月30日2面。
- 註29 『福岡日日新聞』明治28年（1895）11月13日3面、11月17日2面。
- 註30 『福陵新報』明治28年（1895）11月25日3面。
- 註31 『福岡日日新聞』明治28年（1895）11月28日2面。
- 註32 『福岡日日新聞』明治29年（1896）1月17日3面。
- 註33 『福陵新報』明治29年（1896）7月1日2面。
- 註34 『福陵新報』明治29年（1896）12月2日3面。
- 註35 『福岡日日新聞』明治30年（1897）4月1日5面。
- 註36 『福陵新報』明治30年（1897）5月19日2面。
- 註37 『福陵新報』明治30年（1897）5月21日2面、5月22日2面。
- 註38 『福岡日日新聞』明治30年（1897）9月7日5面、『福陵新報』明治30年（1897）9月7日5面。
- 註39 『福陵新報』明治30年（1897）10月6日2面。
- 註40 『福岡日日新聞』明治30年（1897）11月13日2面。
- 註41 『九州日報』明治31年（1898）5月15日5面。
- 註42 『九州日報』明治31年（1898）12月28日5面。
- 註43 『九州日報』明治32年（1899）4月2日2面。
- 註44 『九州日報』明治32年（1899）4月8日3面。
- 註45 『福岡日日新聞』明治33年（1900）10月24日1面、10月26日4面、11月2日3面。
- 註46 『福岡日日新聞』明治33年（1900）10月30日1面、10月31日3面。
- 註47 『福岡日日新聞』明治33年（1900）12月4日4面。
- 註48 『福岡日日新聞』明治34年（1901）4月24日4面。
- 註49 『福岡日日新聞』明治34年（1901）12月17日4面。
- 註50 『福岡日日新聞』明治35年（1902）1月7日4面。
- 註51 『福岡日日新聞』明治35年（1902）1月18日1面。
- 註52 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月18日1面。
- 註53 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月26日4面。
- 註54 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月27日4面。
- 註55 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月30日4面。
- 註56 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月30日4面。
- 註57 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月1日4面。

- 註58 『福岡日日新聞』明治35年（1902）2月18日4面。
- 註59 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月5日4面。
- 註60 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月3日1面。
- 註61 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月3日4面。
- 註62 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月2日4面。
- 註63 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月5日4面。
- 註64 『福岡日日新聞』明治35年（1902）3月18日3面。
- 註65 『福岡日日新聞』明治35年（1902）4月24日1面。
- 註66 『福岡日日新聞』明治35年（1902）5月4日3面。
- 註67 『福岡日日新聞』明治35年（1902）11月1日4面。
- 註68 『福岡日日新聞』明治35年（1902）12月23日4面。
- 註69 『福岡日日新聞』明治36年（1903）3月1日4面。
- 註70 『福岡日日新聞』明治36年（1903）3月13日4面。
- 註71 『福岡日日新聞』明治37年（1904）2月6日4面。
- 註72 『福岡日日新聞』明治37年（1904）9月22日4面。
- 註73 『福岡日日新聞』明治38年（1905）2月21日4面。
- 註74 『福岡日日新聞』明治38年（1905）6月27日4面。
- 註75 『福岡日日新聞』明治39年（1906）8月24日3面。
- 註76 『福岡日日新聞』明治39年（1906）10月3日5面、10月9日5面。
- 註77 『福岡日日新聞』明治39年（1906）10月16日5面。
- 註78 『福岡日日新聞』明治40年（1907）2月8日5面。
- 註79 『福岡日日新聞』明治40年（1907）3月3日5面、3月8日5面。
- 註80 『福岡日日新聞』明治40年（1907）12月14日5面。

（たなべ・たかお 筑紫女学園大学人間文化研究所客員研究員）